宮柊二の歌

島田修二

花神社

著者紹介

島田修二（しまだ・しゅうじ）

1928年8月、神奈川県横須賀市生れ。

1945年、海軍兵学校生徒として終戦をむかえる。

1953年、東京大学文学部卒。

1947年、多磨短歌会に入会。1951年、宮柊二に師事。1953年、「コスモス」創刊に参加。コスモス賞、O先生賞受賞。1963年、歌集『花火の星』（第10回日本歌人クラブ推薦歌集）以降、『青夏』、『冬音』、『島田修二歌集』を刊行。現代歌人協会理事。

＊宮柊二（みやしゅうじ）の歌（うた）

1980年12月10日　初版1刷

定価1800円

著　者　島田　修二

題　字　著　　者

発行者　大久保憲一

発行所　株式会社花神社（かしん）

東京都千代田区猿楽町2—2—5　興新ビル605　〒101

電話　東京・291・6569　振替　東京2—194949

印刷・信毎書籍印刷＋コーエー

製本・美成社　用紙布・文化エージェント＋ワールドクロス

0095—800112—1092

©SHŪJI SHIMADA

Printed in Japan

目次

I

『群鶏』以前

靄ごもる佐渡の岬を望みつつ吾が舟は急ぎぬ青海原を……一九

夜明けには遠しと思ふ原を来て薄にそそぐ氷雨をききぬ……二一

『群鶏』

目にまもりただに坐るなり仕事場にたまる胡粉の白き塵の層……二三

木地の稜磨りおとしつつかなしくて生くらくはたのし和み来につる……二四

目瞑りてひたぶるにありきほひつつ憑みし汝はすでに人の妻……二五

熱きものこみあげて来ぬ思へばあはれ様々に人は謀りき……二六

吾に死ねとおもほし召せか西平け尚し征せとふ東の国を……二七

推量りうかがひまつるみ心やおろそかならずかなしかりけり……二七

走水かの日の暗き波のまに入りて没みし弟橘や……二七

汝が胸に顔を埋めて哭くときしかなしかりけるこころ和みき……二七

地にきこゆ斑鳩のこゑにうち混りわが殺りしものの声がするなり……二七

目庇してふり放け見れど故郷や国のまほろば大和し杳し……二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山かげを曲みゆく水のとほじろき一筋を見ればせぐる涙ぞ……二七
山くぼの一本菅の風に吹かれ立ちゆきし従者等とほくなりたり……二七
切支丹殉教の事一日調べて疲るれば暗き畳に臥しまろびをり……二九
楓のプロペラ型の実を見れば南風うけつつそよがぬぞなき……三〇
昼間みし合歓のあかき花のいろをあこがれの如くよる憶ひをり……三一
法隆寺南大門前暑き日を黒き牛のゐて繋がれにけり……三二
ほれぼれと笑まへる伎楽の面見れば笑へ笑へとわれに言ふごとし……三三
花のやうに日暮の鳥屋に眠りゐる鶏を姉とわれと見てゐつ……三四
夜に聴けば矢振間川の川の音の魚野川に注ぐおときこゆ……三五
磧に赤き旗たてて砂利場あり赤き旗はかなし孤のごとく……三六
内暗き御刀砥師の家の前過ぎきて冬の風を背に受く……三六
大君の醜の御楯と征ちゆきてこゑ無き屍と焼かるる誰誰……三七
角吹きて踊るヂプシーの絵を見れば流浪といふも恰しきに似つ……三八
土の鈴鳴らして昨夜は遊びゐき一国は欧洲にこの朝無し……三九
日蔭より日の照る方に群鶏の数多き脚歩みてゆくも……四〇
群鶏の数を離れて風中に一羽立つ鶏の眼ぞ澄める……四〇
つき放れし貨車が夕光に走りつつ寂しきまでにとどまらずけり……四二

『山西省』

星満つる峠越え来て楢の木の夜空に張りし枝仰ぐかも……四三
たたかひの最中静もる時ありて庭鳥啼けりおそろしく寂し……四四
肩寄せて綾目も分かぬ夜の磧を睡りつつ行きいくたびも転ぶ……四五
おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ……四六
鞍傷に朝の青蠅を集らせて砲架の馬の口の草液……四七
ころぶして銃抱へたるわが影の黄河の岸の一人の兵の影……四八
目の前に黄河はひかる汝が死の昨日の夜なる確さ薄し……四九
ほとんどに面変しつつわが部隊屍馬ありて腐れし磧も越ゆ……四九
ねむりをる体の上を夜の獣穢れてとほれり通らしめつつ……五〇
軍衣袴も銃も剣も差上げて暁渉る河の名を知らず……五一
帯剣の手入をなしつ血の曇落ちねど告ぐべきことにもあらず……五二
蠟燭の炎直立ち静かなる夜半なり雪に砲声きこゆ……五三
亡骸に火がまはらずて噎せたりと互に語るおもひ出でてあはれ……五四
滹沱河の水の響の空を打ち秋は来にけり大き石の影……五五
左前頸部左顳顬部穿透性貫通銃創と既に意識なき君がこと誌す……五六
稲青き水田見ゆとふささやきが潮となりて後尾へ伝ふ……五六
うつそみの骨身を打ちて雨寒しこの世にし遇ふ最後の雨か……五七

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す……六六
あはれあはれ死を決したる角逐がパノラマの如く目に映じをり……六〇
耳を切りしヴアン・ゴッホを思ひ孤独を思ひ戦争と個人をおもひて眠らず…六〇
こゑあげて哭けば汾河の河音の全く絶えたる霜夜風音……六二
寒蟬が庭の立木に来て鳴くを駭き言へば姉の頷く……六三

『小紺珠』

たたかひを終りたる身を遊ばせて石群れる谷川を越ゆ……六四
めぐりたる岩の片かげ暗くして湧き清水ひとつ日暮れのごとし……六五
焼跡に溜れる水と帚草そを囲りつつただよふ不安……六六
とどまれる一貨車の列黒けれど危ふげもなく夜に入りゆかむ……六七
孤独なる姿惜しみて吊し経し塩鮭も今日ひきおろすかな……六八
一本の蠟燃しつつ妻も吾も暗き泉を聴くごとくゐる……六九
たゆたへるわが朝夕を振りかへり弱きオポチユニストとなる勿れ……六九
静かなる冬に入るとぞ水透きて鱗の型の河底の砂……七一
鞭ふりて寒き路上に独楽を打つ少年四五種類の甲だかき声……七二
罌粟のはなまぼろしに来て紅く満つ過ぎにしものらなべて悲しも……七三
町川のそこり黒きをひとり見て赤子の眠る家に帰り来……七三
ゆらゆらに心恐れて幾たびか憲法第九条読む病む妻の側……七五

悲しみを窺ふごとも青銅色のかなぶん一つ夜半に来てをり……七六
ふところに林檎を秘めて来寄りたる洟垂子を差し上げにけり……七六
貧しき祖国とおもふ砂の上にしたたりて黒き重油惜しめば……七七
積みあげし鋼の青き断面に流らふ雨や無援の思想あり……七八
応答に抑揚ひくき日本語よ東洋の暗さを歩み来しこゑ……七九
堅炭を一俵買ひて蔵ふとぞああ吾妻はやその果無事……八〇
くらやみに煙は見えつつまぼろしの「もつと苦しめ」と言ふ声ぞする……八一
いくばくかわれの心の傾斜して日当る坂を登りつつあり……八一
地下足袋にわが踏みゆけばいくさより寂しき山の落葉の音す……八二

Ⅱ

『晩夏』

梅の花ぎつしり咲きし園ゆくと泪ぐましも日本人われ……八七
笛を吹く緑の体の小河童も悲しからむと妄想に持つ……八八
かすかなる地震なりしかど人知らぬあかつきの雨の中に揺れたり……八九
しづかなる悲哀のごとくわが門の星の明りに向日葵立てり……八九
家ごもりもの書きくらせり省ればハイネの如くわれは詠はず……九〇
この夏を充たしめたまへ汲む水の茶碗に清く溢れゆくごと……九一

横浜に呼名風太郎の群を見て雨ふる銀座をいま歩きをり……九二
行春の銀座の雨に来て佇てり韃靼人セミヨーンのごときおもひぞ……九三
惨たる戦争態の来らむを知らざりし殉死の将軍かなし……九四
前掛をしめて前ゆく少年もはや清浄の原型ならず……九五
おぼろなる行為なしつつ移りゆく一群も思想を表白せよ……九六
かかはりを互に持たぬ動物か濡れし歩道に犬と鳩とわれ……九七
ふぐり下げ歩道を赤き犬はゆく帽深きニイチエはその後を行く……九八
とほくより訣のわからぬもののみの流れ来流れ行きいまわれの生……九九
徐々徐々にこころになりしおもひ一つ自然在なる平和はあらず……一〇〇
この朝の南風迅くて電車待つ戦後派の髪乱れつつあり……一〇一
流れつつ藻も芥も永遠に向ふがごとく水の面にあり……一〇二
さ庭べに夏の西日のさしきつつ「忘却」のごと鞦韆は垂る……一〇三

『日本挽歌』

七階に空ゆく雁のこゑきこえこころしづまる吾が生あはれ……一〇五
つらなめて雁ゆきにけりそのこゑのはろばろしさに心は揺ぐ……一〇六
毎日の勤務のなかのをりふしに呆然とをるをわが秘密とす……一〇六
幾百の恋愛を街上に見遍して目を瞬く寂し寂し我は……一〇八
かすかなる歓びにしも譬ふべく運河の面の夕映えの黄ぞ……一〇八

三人子をつぎつぎと呼び囲らせばけぶるがにきよし妻なれど母……二〇九
民衆のおももちなして鞭かざしけもの一匹を打擲せんか……二一〇
足の爪きれば乾きて飛びけりと誰に告ぐべしや身のさかり過ぐ……二一一
群れる蝌蚪の卵に春日さす生れたければ生れてみよ……二一二
生きむ日のさながら悲し移りきて若からぬ日に山鳩啼けり……二一三
わが無くばいかになりゆく幼らと藜に遊ぶ後姿を目守る……二一三
あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり……二一四
新しきとしのひかりの檻に射し象や駱駝はなにおもふらむ……二一五
不可思議のしづけさつくる音にして小さき時計の秒すすむ音……二一六
娶らんとする青年が欲しと言ひ贈らんと言ひ釜買ひに出づ……二一七
ひらめきてわれが身内をはしりたる激しき恥に頸を垂るる……二一八
惑ひつつ梅雨ふかき道にいでてきつわが妻襤褸子らも襤褸……二一九
曇映る川に水馬のしづかなる群りざまを見て帰りきぬ……二二〇
根づきこし挿木見下し立ちてをりわがこころかすかに奮ひ起たむとす……二二〇
竹群に朝の百舌鳴きいのち深し厨にしろく冬の塩……二二一
蠟燭の長き炎のかがやきて揺れたるごとき若き代過ぎぬ……二二二

『多く夜の歌』

あはあはと陽当る午後の灰皿にただ一つ煙を上ぐる吸殻……二二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暗黒にわれはゐたれば暗黒は和ならずして次第に疲る……一三五
谷川に下りきたれば岩の間の砂ぬれて蟬のなきがらを置く……一三六
夜空より吹きおろしざま吹き入りて竹群ふかくひびきゆく風……一三七
両の手に少女が部屋にはこびくる蠟の炎のきよきくれなゐ……一三八
おもほえば恥ふかむのみ一切事悪せぬのみの茫々にあり……一三九
あきらめてみづからなせど下心ふかく俸給取を蔑まむとす……一三〇
ならびたる野菜なつかしなかんづく水うたれたる紫蘇の数束……一三一
庭土の凹処に溜る雨水が文目草一叢しづかに映す……一三一
扱きつつ新聞を鳴らし配りゆく少年の力も見遁したまふな……一三二
鉄骨の建物を中にそだてゐる櫓の下に酔ひてきたりぬ……一三三
さまざまに見る夢ありてそのひとつ馬の蹄を洗ひやりゐき……一三四
つつましき勤人らの家垣の祝祭ひそか蔓薔薇咲きつぐ……一三五
わが妻が手相占へて貰ひたる手相見を見に来たれば媼……一三六
怒をばしづめんとして地の果の白大陸暗緑海をしのびゐたりき……一三七
泡碧くかたまれる如兄弟らあひ寄れる如あぢさゐ蕾む……一三八
人工の星廻る空昼を澄みこのあたらしき空虚感はや……一三九
寂しかる空間や貨車と貨車つなぐ鋼の黒き連結器見え……一四〇
馬跳びの子らの遊びを見おろすに馬として待つ子の背の孤独……一四一
錐・鋏光れるものは筆差に静かなるかな雪つもる夜を……一四二

いざさらば別離と父が綴りたるいやはての字を辿りつつ読む……一四三
七階の下なる都心たまたまを往来絶えし車道歩道見ゆ……一四五
曇り空負ふ硝子戸を背後とす白き二枚の辞令をさげて……一四六
悲しみの顔と言ひしと人伝てに聞きしより遠く其の人を避く……一四七
青春を晩年にわが生きゆかん離々たる中年の泪を蔵す……一四八
灯を明かく待ちゐし妻にたまものの絵を遣らん初めて愛を言はん……一四九
早川のはやき響みにをののきて目覚めてゐたり眠りがたしも……一五〇

Ⅲ

『藤棚の下の小室』

海じほに注してながるる川水のしづけさに似て年あらたまる……一五五
河口よりのぼりくる風草焼きの炎の先を折り折りに堰く……一五六
萌えいでし若葉や棗は緑の金、百日紅はくれなゐの金……一五七
山椒の揺るる葉影を宿しつつ電柱は立つ乾ける白昼……一五八
放射能の塵降るらむをわが子らも世の子らのごと母ありて眠る……一五九
形容をなしがたきまで己れ厭ふこころ残りて朝方に覚む……一六〇
女のみ増ゆる家庭に少年が一人おどおどと混りて育つ……一六一
夜の道の車の中に人の性自が性なべて憎まむとせる……一六二

空ひびき土ひびきして吹雪する寂しき国ぞわが生れぐに　……一六四
過去多くなりしとおもふ言ひがたく致しかた無く過去積りゆく　……一六五
逸民の一人とおもひ人気なき鳥獣園に朝来て遊ぶ……一六六
島めぐる暗き潮に一点の朱を刻みたり山を現でし日……一六七
島山の太き腹部を一刀に断落したるごとき垂直……一六七
道の辺に避けむとしたりくれなゐに渦巻けるごとき林檎の皮　……一六八
小歌誌に憑み寄りつつ悲しみを抱きて共に十年を過ぐ……一六九
隣り家の硝子戸のいろわが庭の木の間に見えて雪降るあした　……一七〇
風かよふ棚一隅に房花の藤揉み合へばむらさきの闇……一七一
仕方なく生くるならねど花吹雪身をつつむとき吾が狼狽へつ　……一七三
藤棚の茂りの下の小室にわれの孤りを許す世界あり……一七四
日本のかの日復返り松葉牡丹あかあか咲けり手記四百篇　……一七五

『獨石馬』

町川の岸ゆく人が下げ持てる風呂敷のなか柱時計鳴る　……一七八
自転車に囮籠載せ少年は人混み縫ひて冬山へ行く……一七八
移りゆく時に従ひ滅びたり古き油のごとき生業も……一七九
音長く劫より吹きてくるごとき風鳴り響く海の上にて　……一八〇
秋霖雨に見しかの日より土井のこの大竹群を恋ひ恋ひてきぬ……一八一

目交に立つ大竹は冬の日のその若膚の青曇せり……一八一
兵の日を思ひ出でをり北支那に見ざりし青き日本の竹……一八一
早風に竹の梢の揉まれゐる動きは下の幹にも伝ふ……一八一
ビール飲む通夜の席に若き日の君の如くに起ちてくるなし……一八二
白きもの剛きもの、あたらしき讃歌のごと霜柱満つ……一八三
三鷹なる吾妻はいまは眠りしや寒し寒しと帰り行きしが……一八五
黒人の宇宙飛行士混らざる米国アポロ計画を思ふ……一八六
鳥にあり獣にあり他にあり我にあり生命といふは何を働く……一八七
あたらしく玉取換へし眼鏡にて仰げば空の春の星青き……一八八
労働者深く憩へば頭垂れ炎立つもなく独石馬のごと……一八九
ピアノ鳴る音きこえきて現しかる人生を思ひ悲哀なども思ふ……一九〇
プラハにて人の綴れる一文の忘れがたくて冬過ぎにけり……一九一
化粧して顔立ちまさに君なるを見守り立ちて足萎えむとす……一九二
雨ののち吹く風ありて風のなか色くれなゐに顕ちてくる合歓……一九三
あぢさゐの花いろ深む葬の日なみだ流れて君をばおもふ……一九四
胸の裡騒ぎてひとり思ふなり膃肭獣のごと老いてゆくのか……一九五
空深く雨くだりゐる寂しさを憶ふなどしてわが生きんとす……一九六
一涯なる感じ、草むらのひとつところに陽は差してゐて……一九七
戦地の最中の君をしのびつつ悲しくゐたり暑き日の昼……一九八

生き残りたるもの我の胸に未だなほなまなまし「戦死」といふは……一九八
「漢の武帝の天漢二年秋九月」諳じてゐる小説冒頭……一九九
沖縄のデモ隊映すテレビをば妻も娘もゐぬ昼に見てゐる……二〇〇
坂にしてわれは暮しを思ひけり雨のごとくに落葉打つゆゑ……二〇一
使はるること無くなりし「小市民」といふ語わが子もすでに知らざり……二〇二

『忘瓦亭の歌』

去りゆきし少年時、戦時、壮年時、還暦一歳爾後の茫々……二〇四
すたれたる体横たへ枇杷の木の古き落葉のごときかなしみ……二〇五
体験は逸るべからぬ生にしてわれの躰のかく痛むはや……二〇六
日のいまだ射しこぬ空やあかつきの浄き緑に雲は静まる……二〇七
嫁ぐ子に歌を遣らむとしろたへの紙展べてをり雨響く夜に……二〇八
人はいさ子は憶へこそ貧しさに耐へこし父の詩の真実を……二〇八
単純に単純に歌を作さんとしどろどろとせる心を鎮む……二〇九
そそり立つ天の岩肌湧く水の滲み光るは詩のごとしとも……二一〇
長の子の机に思ひその年ごろ無頼にありし父の子我は……二一一
人いふに驚き思ふ昭和五十年古びてさらに生きをり我は……二一二
嗚呼あれが三途の川か風底に音なく白く磧見え来ぬ……二一三
花韮の咲く花のみが数へ得る白さにありて春の夜の庭……二一四

原爆を阻まん国の声響むこの日の夕べ蟬生まれゆく……二五
またたびを食みては昼をウヰスキー飲みつつぞゐる八月十五日……二六
いささかの空事まじる若き日のこの歌ながらなほ執着す……二八
わが少女処女となりて愛しきやし嫁したき人の名を告げしとぞ……二九
梅雨ゆふべ硝子戸のまへ紫陽花を提げて行く人亡き君か否……三〇
まだ暗きさなかに目覚め病院の一つベッドに平たく居りつ……三一
自らの尿はこび来て並べ置く人のものなるコップの列に……三二
わぎのちや吾が先長し白秋ののちなる歌を創りかゆかん……三三
そよ、子らが遊びのままにつもる塵白雲かかる山となるまで……三三
篠花の伊勢なでしこの紅白の花しづまりてこの日かがやく……三四
冬の夜の吹雪の音におびえたるわれを小床に抱きしめし母……三五
あとがき……三八
初二句索引……三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com